

北信越各県と越前市とのゆかり

大和時代

- ①丸岡（坂井市）に本拠を持っていた継体天皇は、南越地方に進出し越前市の武生盆地で勢力を蓄え、大和へ進出したと考えられます。嶺北一帯を手中に治めた継体を支えた一族に江沼氏や能登氏も加わっていました。
- ②この時代は、現在の敦賀から新潟・山形一帯を「越の国」といい、日本海に面していて、大陸文化をいち早く受け入れる表日本でありました。大陸からの優れた技術が武生盆地に齎され「和紙」「織物」「焼き物」「漆器」など後世に繋がる産業が興されました。

越前和紙



- ③この「越の国」が三分割されて越前・越中・越後となりますが、越前の中には能登と加賀が含まれていました。

奈良時代

- ①越前の国府の所在地になったのが武生（越前市）です。武生の国府には名だたる国司が赴任してきました。越前国守は能登・越中・越後・佐渡を監督する按察使（あぜち）に任じられました。
- ②越中守の大伴家持は越前掾であった大伴池主（大伴一族）に歌を贈っています。深い交流があったことが分ります。
- ③東大寺の荘園が越前・加賀・越中に開かれますが、国府のあった武生とも関わりが深く、北陸一帯の東大寺荘園として捉える必要があります。

平安時代

- ①越前守となった藤原為時が娘の紫式部とともに武生にやって来たことはよく知られていることです。藤原為時は後に越後守となって、越後へ赴任しました。

紫式部公園



- ②木曾義仲は北陸道から京に上りました。これを阻止しようと平氏は10万の兵を北陸へ派遣し、今庄での戦い、倶利伽羅峠の戦いなど激戦が展開されました。北陸の多くの武士がこの戦いに参加しました。

鎌倉時代

- ①越前市出身（帆山）の瑩山紹瑾（けいざんじょうきん）は能登に総持寺を開き、曹洞宗発展の基礎を築きました。

室町時代

- ①南北朝時代の争乱時には北陸地方の武士達も北朝と南朝に分かれて戦いました。国をまたいで攻防が展開されました。特に越前の中心であった府中（武生）の攻防は激烈でした。
- ②龍泉寺（越前市）は、通幻寂霊（幽霊伝説）が開いた曹洞宗の寺院で、永平寺（永平寺町）や総持寺（石川県）へ参禅する雲水の関門でした。

龍泉寺



- ③武生では打刃物の生産が始まりました。特に、江戸時代になってこの生産はピークを迎え、「越前鎌」「越前打刃物」として広く全国に知られるようになりました。

越前打刃物



戦国時代

- ①朝倉氏が本拠を一乗谷に構えると、武生には府中奉行所が置かれました。
- ②伊勢国に生れた真盛は信濃の善光寺に参詣の帰り、府中の総社を足がかりに越前にて天台宗を布教、引接寺を建て天台真盛宗の中本山としました。
- ③浄土真宗（一向宗）本願寺8世の蓮如が吉崎（坂井市）を布教の拠点とすることによって、北陸一帯に一向宗が広まりました。陽願寺は蓮如の弟子善鎮によって開かれた寺です。毎年春の蓮如忌には超恩寺・浄秀寺や円宮寺（いずれも越前市）に泊まることになっています。
- ④朝倉氏の滅亡後、加賀の一向一揆と手を結んだ越前の一向一揆は、府中に拠点を置き信長と対峙しました。このとき3万余の宗徒が殺されたと伝えられます。
- ⑤信長は、府中（武生）近辺の防備と北庄（福井市）の柴田勝家を監視する役として、前田利家・佐々成政・不破光治の「府中三人衆」を置きました。

〔前田利家〕

前田利家は、はじめて大名に取り立てられ、現在の越前市役所の地に府中城を築き、上杉氏（越後）の南下を阻止する拠点にしました。利家が府中で培った大名としての資質、家臣団の掌握、築城技術等々は後の七尾や金沢へ移っても生かされたのです。利家は宝円寺七世大透和尚に帰依し、七尾・金沢にも宝円寺を建立しました。加賀藩三代藩主利常の母は、上木新兵衛（越前市高木町）の娘です。上木氏の一族が府中に経王寺を建立していますが、金沢にも経王寺が建てられています。府中時代に懇意にしていた大文字屋との関係も深く、利家が府中を去るとき、文室（越前市）の金山採掘権を与え、参勤交代時の本陣を任せています。大文字屋は正月には年頭祝に出かかっています。又、越前万歳も府中時代に庇護された縁で、越前万歳の初舞は金沢であったと言われます。ですから、加賀百万石の基礎は府中（武生）で培われたと言っても過言ではありません。

宝円寺



〔佐々成政〕

佐々成政は越前市の東部、かつては朝倉氏の本拠地一乗谷からのびていた朝倉街道の要衝地に小丸城（県指定史跡）を築城しました。築城半ばに富山への国替えがなされ、越中へ移りますが、越前で成政の家臣団に加えられた越前出身者も多く彼に従いました。

小丸城跡



〔不破光治〕

不破光治は龍門寺城（越前市 信長の朝倉氏征討や一向一揆平定の拠点となった城）に拠りました。不破一族は後、利家家臣団に組み入れられます。

府中三人衆が去ったあとには、秀吉の信頼を得た武将が府中の守りにつきました。

江戸時代

①府中領主本多家

関が原の合戦で勝利した徳川家康は、越前一国を我が子の結城秀康に与えました。15歳から秀康に従った本多富正は家康に信頼され（家康から拝領した名刀大左文字は市指定文化財）、越前藩の付家老として越前へ入り、府中二万七千石（後四万五千石→二万石）の領主となりました。本多氏は、福井藩の家来でありながら、大名扱いで、江戸には屋敷を持ち、参勤交代もしました。明治になって華族制度が出来た時、士族として扱われたことに憤慨した士族や町民が「武生騒動」を起こす原因となったのです。

本多富正は、福井藩の家老としての職責を果たしながら、九頭龍川から福井城下へ引水する「芝原上水」や、九頭龍・足羽・日野川の水害を防ぐための堤（富正を元覚齋といたので「元覚堤」ともいう）を築くなど、産業の振興などの後世に残る仕事もしています。

本多富正の叔父、本多作左衛門（通称「鬼作左」）が家族に充てた手紙「一筆啓上火の用心お仙泣かすな馬肥やせ」が有名です（丸岡（坂井市）の「一筆啓上賞」）。お仙は後の本多成重（後の丸岡城主、富正の従弟）です。

②本保陣屋

越前藩は、2代藩主の忠直・6代藩主の綱昌の失政により所領を減らされました。取り上げた領地は幕府領として、幕府の代官所が管理しました。江戸時代中ごろからその陣屋が本保（越前市本保町）に置かれ「本保陣屋」といいました。後に本保陣屋は高山陣屋の支配下に入ります。天保の飢饉で越前の農民を救ったのが、高山の代官大井永昌で、彼の功績に感謝して建立されたのが「天保救荒碑」（市指定文化財）です。

本保陣屋跡



③白崎陣屋

戦国時代に活躍した名将に金森長近がいます。彼は最初に大野城主（大野市）になりますが、国替によって高山城主になりました。江戸時代の中ごろ、金森家は改易となり御家は断絶しました。しかし、名家である金森家をなくすことを惜しんだ幕府は、分家の金森左京に対して越前国に三千石を与え、金森家を存続させました。この陣屋が置かれたのが白崎陣屋（越前市白崎町）です。

本保陣屋・白崎陣屋はともに高山市と関りが深く、越前市と高山市が「友好都市提携」した所以です。

④農村の余業・出稼ぎとして「漆かき」がありました。信州や関東・東北へも出稼ぎに行ったのです。出稼ぎ先で人柄が認められて結婚した人も少なくないようです。

⑤幕末に府中（武生）の豪商松井耕雪や山本平三郎等は松平春嶽（福井藩主）に重んじられ、産業振興の面で活躍しました。また、由利公正等の福井藩の重臣らとの付き合いも盛んでした。山本平三郎の従弟に橘曙覧がいます。曙覧の母は、乳飲み子の曙覧を残して他界しました。曙覧は、母の実家である府中天王屋（山本平三郎）で育ちました。曙覧の基礎学力は府中で育まれたのです。

近前代

明治4年の廃藩置県によって目まぐるしく県が変わりました。武生（明治2年、「府中」を「催馬楽」にある古地名から「武生」に改称）は明治9年から石川県に含まれ、明治14年2月7日に福井県が誕生するまで続きました。